

O-8-45

男性看護師会が担う役割と今後の課題

名古屋第二赤十字病院 看護部

○萩野 正嗣、中山 望、古城 敦子

【はじめに】男性看護師の就業率は年々増加している。当院でも今年度は5名の男性看護師が入職し、現在69名の男性看護師が在籍しているが、全体の約7%と依然としてマイノリティである。また、男性看護師間で話す機会がなく名前も知らないなど関係が希薄であった。2013年度には新採用された男性看護師7人中4人が1年を待たずに途中退社した。悩みを共有する相手がいない、男性看護師の役割モデルがないなど、男性看護師を取り巻く環境に多くの問題が明らかになった。そこで、男性看護師の定着と連携を強化し、働きやすい職場環境を構築することを目的に、2014年男性看護師会を発足したので、この2年間を振り返り、今後の課題について報告する。

【活動の実績】活動は年4回の定例会と、新人男性看護師のフォローとして年4回の新人男性看護師会を行っている。定例会は、所属や経験年数の垣根を越えて話し合える機会とした。また、他職種や他病院・訪問看護の男性看護師を招いて交流会を定期的に行った。

【男性看護師会2年間の評価】2014年度新採用された男性看護師11名中1名が途中退社したが、2015年度の退職者はゼロ、男性看護師会発足後の新人男性看護師の離職率は減少した。現在は、新採用者が悩みを訴えた時は男性看護師会で面接できる体制を整えた。

【今後の課題】新人男性看護師の離職率は減少しているが、更なる定着と働きやすい職場環境を構築するために、男性看護師会として病院や看護部に問題提起が出来るような会の運営が求められる。また、新採用者だけでなく2年目以降の男性看護師のフォローができる体制構築が求められる。【結語】男性看護師会は依然としてマイノリティであり、男性看護師会は継続して活動すべきである。男性看護師会は離職率の低下だけでなく、男性看護師の確保や質の確保に繋がると考える。

O-9-27

冷電法による安楽効果の検証

—主観的評価と唾液アミラーゼ測定を用いて—

北見赤十字病院 看護部

○坂本龍之助、松浦 飛翔

【諸言】A病院の看護実践場面で、入院患者が不安感の軽減や入眠促進を目的に冷電法を希望する場面があった。そこで、本研究では、一般成人を対象に客観的なストレス評価の指標として唾液アミラーゼ値を測定し、後頭部冷電法施行がもたらす主観的評価と生体学的変化について明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は、A病院に勤務する職員、男女計20名、平均年齢は36.8歳、平均BMIは20.8であった。同一被験者を対象に、10分間安静臥床で過ごしてもらい、後頭部冷電法施行時と非施行時の体温、血圧、脈拍、アミラーゼ値の測定を行った。測定終了後、独自の調査票の回答を依頼した。冷電法施行前後の体温、血圧、脈拍、アミラーゼ値を比較対象とし、対応のあるt検定を行い、有意差を求めた(P<0.05)。調査票は、冷電法施行後のアミラーゼ値と調査項目で多元配置分散分析を行い、有意差を求めた(P<0.05)。

【結果および考察】冷電法施行前後での体温、血圧、脈拍、アミラーゼ値に有意差は認められなかった。冷電法施行後のアミラーゼ平均値と各調査項目において、10項目中4項目で肯定的回答群と否定的回答群間でのアミラーゼ平均値に有意差が認められ(P<0.01、P<0.05)、アミラーゼ平均値が有意に低下していた。被験者の主観的評価が高いほどアミラーゼ値が低い傾向にあった。北山ら(2001)は、冷電法は皮膚感覚の刺激によって局所ならびに全身に気持ちよさを感じさせ、随伴症状を軽減して心身の安楽を図る、と述べている。冷電法を好んでいる人ほど、冷電法施行時の皮膚感覚への刺激が被験者の満足感につながり、結果、アミラーゼが有意に低下したものと考えられた。

【結論】調査票の肯定的回答群と否定的回答群間での平均アミラーゼ値に有意差が認められ、主観的評価が有意に影響し、安楽を促進する可能性がある。

O-9-29

外科術後の腹帯使用の有効性の検討

さいたま赤十字病院 看護部

○小川 優希、田島はるか、今野 友樺

【はじめに】当病棟では、鼠径ヘルニアを除く開腹または腹腔鏡補助下で行う外科手術後、腹帯着用が習慣化されている。腹帯の使用は有効性があるのか、疑問を感じ文献検討を行った。

【研究方法】医学中央雑誌・メディカルオンライン・CiNiiを使用し文献検索をした。

【結果・考察】テーマに関連した文献は12件で、腹帯着用群と非着用群に分け検証されていた項目は次の8項目だった(創痛、ドレーン・ガーゼのズレ、離床、創合併症、スキントラブル、不快・圧迫感、その他)。創痛、ドレーン・ガーゼのズレ、離床、創合併症に関する文献は5件で、全ての文献で全項目有意差はなかった。スキントラブルに関しては1件で、腹帯着用群に接触性皮膚炎が生じた。不快・圧迫感に関しては1件で、不快・圧迫感が気になると答えた患者が多く、その中の80%の患者はドレーンが挿入されていた。患者を対象としたアンケートで「精神的安定や習慣化、創部への羞恥心・不安があるため腹帯着用している」と述べていた。また、腹帯の必要性の問いに必要ないと答えた患者は、着用群0%、非着用群約30%と有意差を認めた。看護師へのアンケートで「不慮患者のドレーン自己抜去予防効果は腹帯では固定力が弱く不十分」と述べていた。文献検討を行った結果、腹帯使用の効果の有意差はなく、むしろ腹帯着用によるデメリットがあった。よって、腹帯の有効性は低いのではないかと考える。患者アンケートによると、腹帯着用により安心感があり長期使用する患者がいるが、腹帯非着用患者からは不安の訴えがない。よって、術後から腹帯を着用しなれば習慣化することはないと考える。

【結論】腹帯非着用による著明なデメリットはない。腹帯着用によるスキントラブル、不快感が生じていたため腹帯着用有効性はない。

O-8-46

急性期病院における看護師長業務の現状分析と対策検討

伊勢赤十字病院 看護部

○瀬川 佐織、中村 良子、松本ゆかり、松崎 美紀、青木 悦子、谷 眞澄

【目的】高稼働の急性期病院の看護管理者においては病床管理や退院調整に時間が割かれ、他の業務が十分行えていないのではと推察した。そこで看護師長業務の現状分析を行い、看護管理業務の現状と課題を明らかにし業務改善や支援方法の検討を行った。

【方法】調査期間：平成27年7月30日～8月7日

対象：業務分析に協力する意思があり、目的・方法について同意を得た看護師長

方法・分析：期間中各師長が選択した平日3日間の業務内容を時系列の調査シートに記入、師長業務調査プロジェクトチームの担当師長がExcelにて集計。倫理的配慮：調査目的・方法について口頭と文書にて説明し、同意を得られた師長を対象に実施する。参加協力の有無による不利益はないことと、調査結果は業務改善や支援等に利用するほか、院外の発表することもありうるが、個人が特定されないよう厳重管理し、適切に処理することを説明する。

【結果】看護部組織に所属する看護師長20名のうち、14名の調査協力があった。業務内容のうち、件数が多かったのは「病床管理に関すること107件」「患者・病棟ラウンド66件」「業務ミーティング54件」「データ管理(DiNQL等)47件」などであった。

【結論】高稼働・高機能の急性期病院においては、さまざまな看護管理上の課題があると思われた。今回看護師長の業務分析によって、専ら病床管理に追われ他の看護管理業務(スタッフ管理、部署運営など)に費やせていない現状が明らかとなった。その後師長業務の支援方法を検討し、一部の業務を他職種に委注すること等につなげた。今後も看護師長がいきいき働ける環境づくりを目指していきたい。

O-9-28

水晶体再建術を受ける患者の思いやニーズ

秦野赤十字病院 看護部 3階東病棟

○相原 彩香、坂本 和、杉本 武史

【はじめに】A病院では、水晶体再建術を受ける患者に対し、医師と看護師が外来で術前オリエンテーションを行なっている。短期間の入院のため、患者の手術に対する思いやニーズを病棟看護師が把握する機会が少ない。そこで、外来受診から退院までの患者の思いやニーズを明らかにするため、本研究に取り組んだ。

【研究方法】平成27年10月～12月に対象者21名に聞き取り調査を行い、データは単純集計と質的に分析・考察した。

【倫理的配慮】対象者にはプライバシーの配慮、自己決定、参加の有無による不利益はない事を紙面・口頭で説明し同意を得た。また、A病院看護部の倫理的審査で承認を得た。

【結果】対象者の年齢は50～80歳代で平均73.7歳。データ分析の結果、10のカテゴリーが抽出された。外来での術前オリエンテーション内容と病棟での実際では、約8割が「相違ない」と答えた。「イメージは湧いたが恐怖心を煽られた」「手術のリスク・合併症を心配する」等の語りがあり「手術自体へのイメージについて」のカテゴリーが抽出された。手術への期待があると答えた患者は約9割おり、不安よりも期待の方が上回っていた。「ゴルフやカメラなどを楽しみたい」等の語りがあり「趣味を楽しみたい」のカテゴリーが抽出された。抱えている手術のイメージと実際では、約6割が「相違ない」と答えた。＜説明通りで安心した＞＜恐怖感や不安があった＞等のカテゴリーも抽出された。

【考察】患者は手術のイメージが出来ていると考えられ外来での術前オリエンテーションは効果的であった。患者の手術に対する思いやニーズを把握することは病棟看護師の役割であり、病棟での術前オリエンテーション時に患者に手術を受けるきっかけやそのエピソード、期待や不安、説明をどの程度理解しているのかなどを確認する必要があると考える。

O-9-30

PEM患者を対象とした「おやつ」の効果について

伊達赤十字病院 看護部7階療養病棟

○平川 綾子、藤田 絵美、星野 由紀

【はじめに】近年、高齢者にたんぱく質エネルギー低栄養(以下PEM)が多発している。PEMは免疫能や薬剤効果、活動性の低下や感染症、褥瘡発生リスクの増大をきたし認知、心理的側面にも大きな影響をおよぼすといわれている。当病棟では約91%の患者がPEMの状態であった。食事形態や種類の変更に加え、10時と15時(以下「おやつ」時間)に水分や栄養補給などの栄養管理を行っているが、PEMとなる患者が多い。今回、PEM患者に対し「おやつ」時間に栄養機能食品を用いた栄養介入の効果を検討した。

【方法】PEM患者12名に「おやつ」時間に栄養機能食品を経口補給した。食事摂取量の調査と栄養機能食品摂取前後と後5ヶ月間、月に1度の血液検査でBMI・ALB・TP値を比較、t検定にて有意差を求めた。

【結果】継続して実施できた患者は6名で、栄養機能食品の摂取困難でドロップアウトした患者はいなかった。BMI・ALB・TP値の比較で、有意差は認められず、数値に変化はなかった。食事摂取量の調査では、おかつの残食率が高かったが調査開始前後で摂取量に変化はなかった。

【考察】血液検査の数値に変化がなかったことから、PEM状態の改善には繋がらなかったが悪化は防げたと考えられる。また、1Hをベッドで過ごし、ADL援助が必要な患者が他患と触れ合い、コミュニケーションを図る機会となる「おやつ」時間を楽しみとしていた。さらに、活動量の増加も認められ自力歩行が可能となり、排泄の自立へ繋がったケースもあった。八木らは「ハイカロリー飲料の摂取は、栄養状態の改善および身体活動の増加に寄与するものと思われる」と述べており、栄養機能食品による栄養介入は、PEM改善の効果だけではなく、療養に対する意欲やADL向上、合併症の回避に繋がると考えられる。